
増殖探偵・丸斗恵

腹筋崩壊参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

増殖探偵・丸斗恵

【Nコード】

N0202Z

【作者名】

腹筋崩壊参謀

【あらすじ】

分身能力を持つボーイッシュな女性局長と、無敵の力を有するガールッシュな男性助手。依頼も推理もないけれど、悪党妖怪未来人。どんな強敵も一網打尽。過去も未来もぶっ飛ばすこの二人を中心に、物語を進めていこうと思います。この作品は別サイト及びpixivにて投稿したものに加筆修正を加えたものとなっております。

01・よつこそ、丸斗探偵局へ

日本のとある街。一人の貴婦人が、途方に暮れていた。

街は今、お祭り真つ盛り。人通りも激しい中、弱弱しい彼女の声は、より賑やかな街の喧噪のなかに消えていく。このままでは、孫どころか自分すら行方が分からなくなりそうだ。そんな事すら思い始めた時、彼女の目にある看板が止まった。

「丸斗…探偵局？」

「はあ…退屈…」

少し古びたビルの一室で、一人の女性が暇を持て余していた。

彼女の名前は「丸斗恵^{まると・めぐみ}」。丸斗探偵局の代表、局長の座に就く女性である。

「それだけ平和な証拠ですよ、局長」

独り言のような彼女の言葉に応える燕尾服の男は、助手の「デューク・マルト」でゅーく・まると」。恵を支える、頼もしい人材である。

ここ「丸斗探偵局」は、局長と助手、二人だけで切り盛りする小規模な探偵事務所である。それゆえ、大事件など持ちこまれることは滅多にない。というか想定していない。…という事で、一日の大半は、事務所内で暇を持て余すというのが日課となっている。

「そんなこと言ってもねえ…仕事なきや生活できないわよ…」

客との相談用に設けてある机にだらしなく持たれかける恵。乱れたセミシヨートの紫髪もさることながら、今の局長のスタイルは警戒心がなさすぎる。露出を嫌うはずなのだが、今の彼女は自分の胸の谷間が服から覗いているを心配する事すら頭になかったようだ。とにかくくだらけていたい、という局長を見て、助手のデュークは呆れ顔で眺めている。腰に届くまで伸びた髪をかき上げるか、黒ぶちの眼鏡を少しだけ持ち上げるか。どちらかをしているという事は、今の状態に少しだけ不満はあるものの、悪くないという現す癖であることを彼は承知していた。

この光景、この探偵局では日常光景である。怠け癖のある恵がだらけ、デュークが突っ込みを入れるという日々を過ごしているのだ。それでもデュークが見限らないのは、彼女と共に働く今の状況を誇りに思っているからである。そしてもう一つ、彼女の「能力」を、自らの「力」で支え続けるために。

と、突然呼び鈴の音がした。慌てて服や髪を整える恵。てんやわんやの彼女は、ネクタイを整えるだけでどんな事態にも対処できる。黒のスーツを着こなすデュークの心構えとは対照的だ。助手が応対し、音の主を探偵局へと誘導する。依頼人が来たのだ。

「ようこそ、丸斗探偵局へ」

今日の依頼人はどこかの貴婦人。どうやら一緒に来た孫が街で行方不明になったらしい。

「そういえば、今日はちょっとした祭りがあるようですね」

「見失った場所は覚えていますか？」

「それが…分からないのです…」

申し訳なさそうな顔の貴婦人。交差点近くで気付いた時、既に孫はいなかったという。

「本当にすいません、何も分からないのにいきなりお邪魔してしまつて…」

「いえ、十分情報は得ました」

「…え？だ、大丈夫なのですか…？」

自信満々の局長。心配そうな貴婦人へ、優しく語り掛ける助手。

「僕たちにお任せ下さい。あなたの依頼、100%解決させます」

探偵局を出た恵は、おもむろに近くの物陰に隠れる。周りに誰もいないことを確認した彼女。恵を見ているのは、頭上に光る太陽だけである。空からの光が、彼女の影を映し出した次の瞬間、それに変化が生じた。まったく同じ形の影が、恵の周りにいくつも現れ始めたのだ。そして、その影を作りだした恵自身も、何人、十数人、何十人と、数を増していく。

これが、増殖探偵「丸斗恵」の力、分身能力である。能力を駆使し、様々な依頼を解決する。これが、丸斗探偵局流の調査方法である。…依頼はあまり来ないが。今回は、恵自身の数をたくさん増やし、風潰しに孫の行方を捜すという作戦だ。

物陰に隠れた人影が数十にも増えた辺りで、恵たちは作戦を実行した。後から後から、まったく同じ女性が次々に現れる光景は、どこことなく異様だ。

そこから「彼女」は自分同士と出会わないように注意しながら、あちこちを探した。交差点近くのコンビニや店、裏道、書店…ちよつくら書店やコンビニで立ち読みをしつつも、各地を捜す恵。しかなかなか見つからない。疲れの色が見え始めた恵たちの脳裏に、

「誘拐」の二文字が浮かぶ。

その時、恵の一人から発見の合図が。貴婦人が見失った近くの道ではぐれ、路地裏で泣いていたようだ。

私たちの苦勞(?)は一体…と想いながらも発見に安心する恵たち。子供の近くにいる一人を残し、まるで煙のように消えていった。その様子を記憶するものは誰もいない。

探偵局。大好きなおばあちゃんと無事再会でき、大喜びの孫。肩の荷が降りた恵とデュークの前に、貴婦人はお礼を差し出した。なんと、それは封筒を厚くするほどの…

(げ、現金!? たくさんのマネー!? お金!?)
目を輝かせる局長と…

(…局長、相変わらずがめつすぎます…)
それに気付いた助手。

そして結果は、現金相当の商品券であった。いつもクレジットを使う貴婦人。ところが今日はお祭りという事もあり、手持ちがこれだけしかなかったようだ。

「ごめんなさい、局長さん。本当ならお金で支払う所なのですが…」
「いいんですよ、無事見つかった事だし。お孫さんの笑顔が今回の依頼料代わりですよ!」

…と爽やかな事を言う局長であったが、勿論本心は惜しむ気持ちがあつたようだ。

(これなら後払いにしてもらうべきだったな…)

依頼人と孫が立ち去った後の探偵局。

「それにしてもこの封筒、どれくらいの商品券が入ってるんだろ…」
「結構入ってる…って局長、早く貸して下さい! 金庫にしまえますよ」

「何するのよデューク! せっかく数えてあげようと思ったのに…」

「絶対無駄な事に使おうとしてましたよね今…」
デュークの心配もごもつともである。恵にお金や金品が回ると、毎回無駄遣いに消えてしまうのだ。毎回報酬をもらつたたびにそんな事をされてはたまらない。

「そつちがその手なら…私も黙つてないわよ！」

宣戦布告をかけると同時に、何人にも増える局長。

「私によこしなさい、デューク！」

「そうはいかないですよ、局長！」

慣れた感じで軽やかにすり抜ける助手。

「……」助手、助手なら待つのが常識でしょ！」「……」

「僕は待ちません！そしてそんな常識はありません！」

今日も賑やかに、丸斗探偵局の『二人』の時は過ぎる…

02・銭湯態勢、デューク・マルト

日本のある町にある探偵事務所「丸斗探偵局」。だが、規模が小さいためか依頼はあまり来ない。という事で、本日も暇なうな状態である。そんな中、局長の恵は、深刻な悩みに直面していた。

「家の風呂が壊れた…」

朝風呂をしていたら、お湯が出なくなってしまったのだ。

「風呂がないと体も洗えない、リラックスも出来ない…」

「局長、そこまで悩むのでしたら僕が…」

「ちよつと黙ってて！ …修理するのも時間かかるし、風呂の予備があればなあ…そうか！」

「どうしましたか？」

彼女は「銭湯」という選択肢を忘れていたのに気付いた。探偵局を開いた当時からお世話になっている場所があるのだ。

「局長、「せんとう」って確か公衆浴場の事ですよ…？」

「そういえばデュークは初めてだったよね？それならなおさら行かないとダメみたい！」

どうせもう夕暮れだし、依頼も無さそうなので探偵局を早めに切り上げることにした恵。心配なデュークを連れ、いざ戦闘…いや、銭湯へ向かう事に。

「おばちゃん、恵です〜！お久しぶりー！」

「あら恵ちゃん。かっこいい男の人まで連れてきて、とうとう春がきたのかな？」

「ち、違つわよ！彼は私の助手であつて、その…もつ、おばちゃん
の意地悪！」

「ふふふ…」

久しぶりに会う番頭のおばちゃんは、今日も元気そうだった。

…しかし、二人が着替え場へ向かう時に、おばちゃんがどこか不安
そうな顔つきだったのをデュークは見逃さない。

一方の局長は、一目散に服を脱ぎ捨て、タオルを体に巻いて風呂へ
直行。一日の疲れを癒す。とはいえ、今日は一日風呂の事を考えて
いただけだったのだが。

「ふう、久しぶりに入るといい気分ね… さすが天然の源泉の真上
に作つてるだけは…！」

…彼女は妙な視線を感じた。別の入浴客？ いや、それにしても変
な方向から感じる。念のため大声を出すと、謎の視線はどこかへ消
えた。

風呂からあがり、腰に手を当ててコーヒーマルスを飲む恵に、長い
髪を結ったデュークが初めての経験の感想を嬉しそうに言った。

「銭湯つて気持ちいいですね！なんか僕や局長の肌が綺麗になつた
気がします」

「あら、いつも綺麗じゃないっていうのかしらデュークくん？ …

ところで、さっきお風呂で変な感じしなかった？」

「え？」

デュークに先程の視線の事を問いかけるが、彼の入った湯「男湯で
は特に何も感じなかったとのこと。ということは、考えられるのは
一つ。誰かが外部から女風呂を覗いている！？」

「ただ、その事を直接おばちゃんに言うのは…」

「言わなきゃならないけど、いづらいわよね…」
対処に悩む探偵と助手。

その時、番頭のおばちゃんが二人を呼んだ。相談したい事があるというのだ。

事情を聴く恵とデューク。

…やはり、先程の視線は「覗き」のようだ。最近、不審な動きをする男性を銭湯の周りでよく見かけるといふのだ。

「警察には相談したのですか？」

「ええ、一応相談はしてみたのよ…でも、確実な証拠がない限りは警察も動けないらしくて…」

「肝心な時に融通が利かないわね…これじゃあもつと覗かれないと解決させないって言ってるのと同じじゃない」

「局長、ちよつと落ち着いて下さい…。」

ところで、ちよつとお聞きしたい事があるのですが」

「どうしました？」

「この銭湯の場所に関してなのですが…」

「場所？」

この銭湯を見てデュークは考えていた事がある。いい具合に古びた銭湯の周りには新しいマンションや、新進企業の本社が目立つ。近くに一軒家もちらほら見かけるとはいえ、土地の買収の話もあるのではないか？

結果はまさにその通りであった。以前から土地の売買についての相談をよく持ちかけられるのだ。

「しつこそうね…じゃない、しつこそうですね…」

「ええ恵ちゃん…おっと失礼局長さん。私もここが大事だからいつもお断りしてるんですけど、何べんも来て…。お二人が来たつい

さつきもまた男の人が何人がやってきましてね…」

(もしかしたら…)

(もしかすると…)

二人の探偵の考えは一致した。「覗き」は企業連中による土地買収の脅しかもしれない。

という事で、悪を撃退するべく、デュークと共にこの話を引き受ける事に。

「ごほん、えー、ところで、今回の事件の解決に伴う報酬の話ですが…」

「うふふ、そういうと思って、これを用意しましたのよ、探偵さん。」

そう言って、おばちゃんがおもむろに出したのは…

「「銭湯の永久無料券!?!」」

そんなものを頂くとはもったいなさすぎると言おうとしたデュークを抑え、目を輝かせた恵は即答で依頼解決を約束した。

(局長…相変わらずですね…というか早く手を口から離してください…)

そして、夜の探偵事務所。今日は残業も兼ねて、この一件の作戦会議をすることにした。

「今回優先すべきは、まず覗き魔の撃退ですね」

「ただ、もし覗き魔が企業と関係していたら、たとえ追い払ってもしつこくくる可能性があるわね…」

「雇われ人ならなおさら。相手はどんな汚い手でも使う可能性がありますし…」

「うーん…」

一瞬の沈黙を止めたのは恵だった。

「…ねえデューク、『あれ』、使える？」

「逆に伺いますが、今まで聞かなかった意味は？」

「心配だったのよ、デュークが乗り気にならないかな…って」

「その心配は無用ですよ、局長。今回は一大事、思う存分使いますよ」

「そうこなくちゃ！」

恵の言う「あれ」とは、一体何だろうか…？

…数日後。常連さんも上がり、静かになった銭湯。そこに一人の女性が来た。

そしてその女性を確認したかのごとく、数名の男が銭湯の周りに集まり出す… 綺麗な黒髪、フォーマルな服装… 仕事帰りの美人は彼らにはうってつけの「撮影材料」だ。

…それを、数名の「同じ姿」の女性たちが追跡していたのに、彼らは気付かない。

男たちは、彼らしか知らない秘密のポイントへ向かった。覗きの被害に遭っている銭湯側も手をこまねいている訳ではない。女湯と男湯を日によって入れ換える事で対処している… ただし敵には動きを読まれているのだが…。

ターゲットが浴室へ入って来た。余りにも浮世離れたそのスタイルに、下心丸出しの男たちは釘付けだ。体を洗い、髪を整え、浴槽へ向かう女性。

と、突然女性は右腕を高々と上げ、そして浴槽へ響かばかりの大きな音を指で鳴らした。その瞬間、覗き魔が見たのは信じられない光景であった。先程まで美しい紫髪の女性が入っていた場所には、

裸の若い長髪の男性が悠々と立っているではないか！

これは一体どういう事なのか？彼らとしては眼をそむけたくなる光景だが、あまりにも突然の出来事に唾然として身動きが出来ない。その時。

「何をしているの？」

彼らの後ろに、腕組をして怒り心頭の女性の姿が！自分たちの行為が見られていた事に気付き、慌てて逃げる覗き魔たち。しかし、女性は何故か追いかけない。追いかける必要なんてないからである…。

近くの道。追手をまいたと思っていた三人…だが。

「逃げるつもり？」

彼らの背後から聞こえた声に振り返ると、先程の女性が同じような格好をして立っているではないか！悲鳴一発、再び逃げ出す三人。追手を撒こうと三方向に逃げ出す三人。しかし、どの方向に逃げても先程の女性が待ち構えていた。

「どこに逃げても」

「貴方達に逃げ場所なんて」

「ないのよ！」

彼らは気付いた。自分たちを追いかけているのは一人ではない事に。そして、彼らは十字路に追い詰められた。周りには、腕組みをした大勢の女性…丸斗探偵局局長、丸斗恵が。

「……なんでもっと早くに気付かなかったのかしら？」

気持ちよさが忘れられない。

「今日は私が銭湯担当だからね、あなたは家でゆっくり浸かってなさい」「何言ってるのよ、私が担当じゃなかったの？」「私よ！」「

いや私！」「

「局長、自分同士で喧嘩しないでくださいよ…」

…しばらくは、丸斗恵が同時に2人以上存在する時間が長くなりそう
うだ。

ドタバタが落ち着き、新聞を見る恵。表紙をめくり、中のページを読む途中、とある記事を見つけた。

銭湯で覗き魔が逮捕されたというのだ。しかも、「全国区の記事」の欄に。記事には、企業に頼まれた覗き屋が、銭湯の価値を下げようとしていたとあった。会社も釈明に追われ、土地買収どころではなさそうだ。

サムズアップでデュークの仕事を褒める恵。笑顔で返すデューク。過去や現在を自由に改変し、様々な事象を思いのままに操作する、「時空改変」と呼ばれる能力。これが、未来からやって来た助手デューク・マルトの得意技であり、担当する業務である。

03・血で血を増やす

基本的にこの小説は「今日も暇な丸斗探偵局」で始まりそうなほど、依頼はあまり来ないここ丸斗探偵局。そして暇そうな丸斗恵。しかし、今日に限ってはそう無かった。丸斗探偵局局长、丸斗恵が今いるのはどこかの廃ビル。口をガムテープで覆われ、体は縛られている。

(完全に油断してた…)

現在、彼女はとある暴力団に捕まっている。何故このようになったのか、説明しよう。

数日前、息子の帰りが遅い事を心配した母親からの依頼があった。それを受け、調査を続けていた恵たちは、次第にある可能性に行きついた。もしかしたら暴走族の一員になったのではないか…というものである。結果は全く関係のないものだったが、本題はここからである。

「やっぱり予想通りだったわね…」

「そのようですね…」

未だに消える事のない暴走族。どうやらその暴走族を金づるにしている暴力団がいるらしい。それに関して助手のデュークが調べたところ、本拠地が近くにある事が分かった。どうやらある大物の暴力団の下っ端が勝手に独立して作ったようで、まだ若い連中が多く、非常に乱暴な一団という内容まで判明。警察もじきに動くであろうという情報も耳に届いている。

「最近、ひったくりや盗難が多いのもこれがあるかもしれません」
「犯人も捕まってるじゃない、顔も分からない。もしかしたら…ね」

と、そんな時に恵はとんでもない事を言い出した。やはりここまでわかった以上、手柄は頂きたいものである。普通、このような事例ではデュークは猛反発を行う。自分たちはあくまで探偵、犯人を逮捕するのは警察の仕事。時空改変という力を持つものの、その力を知り尽くしているが故に、それを無駄に多用する事を避けている。ところが…。

「分かりました」

今回はデュークも大いに賛成した。何か理由はあるようだが、恵はそれについて聞く事は無かった。

早速時空改変の能力が発揮される。過去の世界を作り出す様々な法則や法律、書類、そしてそれに基づく人々の考え。それらの書き換えを行い、「行方不明者調査」の名目で暴力団本拠地近くまで行ける事になった。

そして当日の夜。…なぜ夜かというと、悪人をおびき寄せやすいからと、恵が寝坊したからである。

暴力団本拠地近くまで恵が一人で来た時、突然背後から男に襲われ、口に押しつけられたガーゼの催眠物質を吸ってしまった。そして今、彼女は捕まっている。

恵が探偵である事はとくにばれており、口封じも兼ねて裏商売のAV業者に売り渡そう、と暴力団の連中がその近く談笑していた。分身しようにも、このままだと紐に詰まってるくに体を動かせない。苦悶の表情を浮かべる女探偵。こんな事なら、自分だけではなくデュークも連れてくれば良かった。そう恵は思った…と書きそうだが

彼女はそうは考えていなかった。

突然廃ビルが慌ただしくなった。何者かが乱入してきたのだ。襲いかかる男を軽く退け、恵が閉じ込められていた部屋を見つけたのは…

「悪いけど、人質返してもらおうかしら？」

「丸斗恵」であった。

いざという時のため、もう一人自分を作っていたのだ。これが、彼女第一の奥の手である。

分身したとはいえ、全力疾走の男性をも追い抜く力を持つ恵にとっては、二人で息を合わせれば、硬い紐を引きちぎる事も不可能ではない。自分に礼を言い、ようやく自由が戻った。しかし、当然事態はそれでは終わらない。

「このまま逃げる気か？」

暴力団連中は押しかけて来たもう一人の恵を、双子の姉妹と解釈したようだ。言葉汚く罵る彼らだが、気の強い恵にはそうはいかない。全員まとめて始末してやると意気込む二人の局長。

そして、戦いは彼女の強烈な蹴りから始まった。顎に打ち込まれた衝撃で吹っ飛ぶ男。小娘を捕らえようとする彼らだが、動きやすいジーンズを身につけている二人の恵相手には少々不利な状況であった。女性という事で油断したからか、予想外の押されぎみの男たちの中で、焦った一人が行動を起こした。

「く、くっそおおお！」

次の瞬間、辺りに聞きなれない音が響いた。この国では、滅多に聞

く事が出来ない火薬の音、衝撃の跡。

紐から解かれたばかりの恵が、血まみれになって倒れていた。自分の横で倒れこむもう一人の自分を、もう一人の恵は静かに見つめていた。何を考えているか、動揺しながらも動き出した暴力団員は知らない。当然であろう、まさか次の瞬間あのような光景が起きてしまうのだから。

倒れていたはずの「死体」が、突然光になって消え、そして部屋中に飛んだ血しぶきが人型に膨らみ、次々に「丸斗恵」の姿に変わっているのだ！

「私が相手よ」「私も相手よ」「私もよ」「私も」「私も」「私も」
「私も」「私も」「私も」「私も」「私も」……

恐怖におののく暴力団員の一方、恵の数は次々に増え続けた。銃で撃ち抜いても、その分また増え、逆にこの建物を埋め尽くしていく。そしてついに、暴力団員たちは失神してしまった……。

後はこれを警察に送りこめば大丈夫……と思った恵。分身をいったん消す事にした。……だが。

「あ……あれ」「消えない!?!」「ちよつと、どうなってるのよ!?!」
「私も知らない!」「私も!」

消えない。それどころか血しぶきからの分身が文字通り「分裂」を始めてしまった。ちよつとガン細胞が無限に分裂し続けるのと同じように、本人でも止められなくなってしまっているのだ。

「ちよつと、もう入れないわよ……!」「」「そんな事言っても……」「」
「」「ちよ、もうやめて!」「」「」

しかし、恵の分裂は止まらない。もう部屋という部屋がぎゅう詰めである。このままだと、外に溢れて大変な事になってしまう。こうなつては、もう局長に残された道は一つ。

助けて…！

そして、窓ガラスすら割れかけるほどの缶詰め状態になった時、救世主は現れた。

「局長！大丈夫ですか！」

助手のデューク・マルトだ。手に持ってきたのは簡易型の医療用レーザー。すし詰め恵たちに当てると、次々に光となって消えた。たった数分で、ビルを埋め尽くしていた恵は元通り一人に戻った。

「危ない所でしたね、局長」

「そんなものまで用意して…準備は良いけど実行は遅かったわね、デューク」

「すみません、今後は気をつけます」

次の日。新聞には例の暴力団員が全員逮捕されたというニュースが。しかし、あくまで「警察」が全てを行ったかのように書いてある。局長の能力は見世物なんかじゃない。だから、歴史には残らせない。デュークの得意分野「時空改変」は、主にこのために使われるのだ。なぜあの時賛成したのかデュークに尋ねる恵。口を濁す「最高のアシスタント」の両頬に、お礼のキスをする二人の恵。顔を沸騰させつつ、デュークは最後に改変の仕上げを行った。過去の自分が「憧れの探偵」のピンチを救えるよう、過去に起きた事件に「情報提供者」として「丸斗恵」の名前を加える、という…。

(言えないよな…さすがにあんな事は)

04・そして彼らは出会った

話は少し昔に遡る。

路地裏でチンピラ3人が何かを囲み、殴ったり蹴ったりしている。何か言ったらどうなんだ、そういう彼らに対し、その対象は何も言えない状態となっていた。それは、一人の青年。執事と見間違う燕尾服も、彼らの乱暴のせいでボロボロとなり、長い髪も引きちぎられていた。

しかし、いくらあれだけ殴られ蹴られたのに、彼は笑みを浮かべていた。それに腹を立てたチンピラが、近くにあつた角材をぶつけようとする…。

「あんたたち、何してるの？」

手を止めたチンピラたちが見たのは、腕組みをした一人のスタイルの良い女性だった。

そして、彼女の姿を見て安心したのか、リンチされていた青年は意識を失った…

|||||

現在。

本日依頼の予約が来ている丸斗探偵局。しかし最近掃除をしていなかったので少々埃だらけである。真面目にはたきを用意する助手のデューク。一方局長の丸斗恵は、非常に面倒臭く感じていた。

「局長も手伝ってくださいよ…」

「えー…私も…？よし、じゃあ…この手で行こうか」「」

さっそく分身を作り、掃除を任せようとする彼女。しかし、根本が

嫌がっている以上、分身も掃除を嫌がるというのは当然の流れ。そしてその分身がまた分身を作る。その分身もまたまた分身を作り…。

「ちょっと入れないわよ…」「うぎゅう…そこ邪魔…」

広めの部屋のはずの丸斗探偵局が同一人物でぎゅう詰めになってしまった。これにはさすがのデュークも…

「いい加減にしてください!!」

「デュークのケチ…」「ケチで結構です」

助手に叱られたのを不服に思いつつ、分身同士で協力して掃除をする恵。

とはいえさすがは局長得意の人海戦術、あっという間に綺麗になった探偵局。

と、ちょうどいい所に依頼人がやってきた。瞬時に一人に戻った局長が出迎える。今回の依頼人は女性。そして、その依頼の内容は女性は勿論、男性にも非常に堪えるもの。

「ストーリーカーですか…」

「はい…」

まるで自分を追うように電話がかかったり、視線を感じたり、そのような事がずっと続いているらしい。人権を無視するストーリーカーに憤りを感じる恵の横で、なぜかデュークは依頼人の顔をまじまじと見つめていた。どうしたのかと聞く恵に、依頼人が「彼の知り合いによく似た顔をしていたためだと応える助手。惚れたのかとからかいつつも、しっかりと依頼人には謝る彼女であった。

「どうしますか、局長？」

「デュークの力では…」

「不安なところもありますね…」

依頼人が去った後、作戦会議が始まった。様々な事情があり、盗聴調査に関してはデュークの力を持つてしても丸斗探偵局の領域ではないため、探偵仲間の「調査のプロ」に連絡を入れ、改めて調査することになった。

そんな中、デュークは考えた。あの女性に良く似た顔を、確かに見たことがある。自分もよく知るものだ。しかし、それが何なのかまでは、この時点では思い出せなかったようだ。

それから数日後、探偵仲間と共に依頼人の自宅にお邪魔して調査した。盗聴調査のプロだけあって手際の良い調査が行われたものの、盗聴器は発見されなかった。しかし、今までの経緯を考えると犯人は何らかの形で彼女の動きを把握している事は確かである。そうすると、犯人は外から覗いたりしてるのだろうか。

悩む局長を、依頼人が呼びとめた。探偵局に相談へ言った後から、妙な事を経験したというのだ。例のストーカーは、彼女の行動を先読みしたような電話をしてくる事があるのだ。しかも、十中八九合っていると言うのだ。

それを聞いて、デュークは確信した。今回の犯人と、この女性との関係を。もしかしたら被害を抑えるどころか、犯人を退治できるかもしれない。調査を終えた後、探偵局へ戻ってその旨を局長である恵に報告した彼。暇になってしまった探偵仲間にも後で結果を報告することにし、改めて作戦を練り直す事にした。

再び数日後、住宅地。一人の女性：依頼人の女性が細い路地を歩いている。薄暗い街灯が、もう少しでたどり着く家までの道案内をしていた。夜の寂しさを醸し出す光景が続く。

と、その時。まさに不意打ちの如く背後に突然男が現れ、彼女に刃物を振りかざしてきた。素早くよける依頼人だが、鋭く光るナイフが右肩をかすめた瞬間、目の前から突然男の姿が消え、背後に現れた。そしてそのまま脳天を狙ってナイフを振りおろそうとする男を、依頼人は必死に食い止める。夜の道で続く揉み合い、それを終結させたのは…

「予想通りだったね」

丸斗探偵局助手、デューク・マルトの一声だった。

一瞬慌てる男だが、その顔を見るや否やすぐ体制を立て直し、女性を掴み首に刃物をあてた。彼女を人質にでもして見逃すつもりのもうだ。

一方のデュークも男と同様、相手側の顔を知っていた。

この男、デューク・マルトと同じ未来人。ギャングまがいの行為を行い、逮捕されたのだ。しかし、とある事情で脱獄に成功、同じく牢獄されていた仲間を見捨てて過去へ逃げのびた。今襲っている「依頼人」は、彼が逮捕されるきっかけを作った捜査官の遠い先祖。彼は自らの過去を思いのままに変えようとしているのだ。相変わらず卑怯な真似ばかり、と憎き犯罪者を蔑むデューク。しかし、男にも言い返す材料があった。

「どのツラ下げて俺を卑怯だとか言うんだあ、

大犯罪者さんよお？」

犯罪者、デューク・マルト。

タイムスリップの技術が発達した未来において、歴史を変えること、いわゆる時空改変は「8つ目の大罪」と呼ばれるほどの重罪になっ

ている。かつてのデュークも、「犯罪組織」の一員として何度も大かつ大規模な時空改変を起こし、時空警察に指名手配されているのだ。

ただ、彼のために言うと、今のデュークは決して犯罪者ではない。過去の世界で起きたある出来事がきっかけで、彼は真実を知り、犯罪から身を洗う事を決意。自らの償いの意味で過去へ跳んだ。その後の功績を知っている者も時空警察には多いようで、彼の扱いは現在「義賊」的なものとされている。

しかし、デュークの起こした犯罪歴は決して消える事は無い。生物種の絶滅、文明の崩壊、地殻変動…かつて起こした様々な犯罪を述べ、反応しないデュークを男はおもしろげに罵り続けた。

しかし、このとき男は完全に油断していた。

突然指を噛まれ、依頼人をつかむ腕の力が抜ける。

「なっ!?!」

その隙に逃げる依頼人。未来から来たこの男が得意とする「瞬間移動」で追いつこうとした…が、現れた途端、脳天に強烈なキックを食らわせられ、体制が崩れる。振り返った男が見たのは、もう一人の依頼人だった。

啞然とする彼。気づくと、デュークの姿は消え、代わりに道を覆い尽くす依頼人の大群に囲まれていた。いくら未来の技術が発達しても、瞬時に同一の人物が現れると言う事は決してあり得ない、それが彼の常識であった。だが、時として常識が役に立たない事がある。そういう状態に慣れておらず、恐怖で震える男の手から刃物が落ちた瞬間、無数の依頼人が、男のある「一点」へ集中攻撃を食らわせた。

…遠い未来でも、男の弱点は変わらないようだ。

気絶した殺人未遂犯を見下げている依頼人の一人がデュークの名前を呼ぶと、近くの家の屋根上が歪み、一人の男が姿を現した。そしてデュークが指を鳴らすと、道を埋め尽くす依頼人の姿が、増殖探偵・丸斗恵へと変わった。男の「瞬間移動」と同様、デュークにも能力：「時空改変」という凄まじい能力がある。森羅万象、ほぼあらゆるものを操り、作りだし、消し去る事が出来る。まさに「八番目の大罪」にふさわしい能力だ。今回はこれを使い、恵の姿を依頼人の姿に変え、自らも透明になれる能力を一定時間身に付けたのである。そして犯人をおびき寄せ、一気に退治する。今回の作戦、依頼と共に見事に成功、そして解決した。

翌日。依頼人に事件解決の知らせを届けた恵とデューク。依頼人の安心した笑みを見るのが、探偵業をやって一番幸せな時だ。料金は後で口座に振り込んでもらうことになり、未来史に名を残す凄腕捜査官の遠い先祖は去って行った。

それから少し経ち、落ち着いてきた頃にデュークが局長に尋ねた。あの犯人の男が言ったことである。あの後、犯人はこれまたデュークの時空改変で「下着泥棒」に仕立て上げられた。今頃警察のお世話になっているころだろう。その男が言った。

「僕は大犯罪者、過去へ逃げた臆病者、そして卑怯者……」

心配顔を隠せぬまま彼は恵に改めて問う。こんな自分でも、助手として雇ってくれるのか、と。

それに対する局長の答えは、いつものような明るい声だった。

「いまさら何を心配してるの？」

大事な右腕、大事な助手、それがデューク・マルト。例えどんな苦しい過去を持っていようと、今の彼を信頼しない局長なんて、この世界にいるわけがない、と恵は力強く言った。

その言葉に、とびきりの笑顔で返すデューク。その眼に浮かぶものを、局長に見せるのは、彼としても許せない事。彼女に背を向け、そっと目に滲む水を時空改変で消した。

少し昔。

あの路地裏で出会った二人は、互いの秘密を共有した。

恵の分身の術、デュークの過去。

デュークの方は見てしまった恵の秘密を、恵は自ら語ったデュークの消せない過去を、絶対に漏らさないと約束して。

ここで意気投合した二人。のちに探偵事務所を作ることになるだが、それはまた別の話。

05・隣人調査と嫁入り娘：前編

丸斗探偵局に、依頼が入った。

最近各地で二セ札が多いという事もあり、局長の丸斗恵は助手であるデューク・マルトにしっかりと確認するように頼んだ。勿論、有能な助手にわざわざ言う必要はないというのは承知の上だが。

「それにしてもがめついですね局長……」

「だって最近ずっとコンビニの安いおにぎりで済ませてるから……そろそろお金が……」

「まったく、この前荒っぽく使ったからですよ……」

やって来たのは近所のアパートに住む管理人のおじさんだった。恵たちも時々スーパーなどで会う顔見知りの関係だ。

彼の持ち込んだ依頼は、「隣人調査」、近隣の人の身元や情報などをあたるものであった。

「実は……この住人についてなんです……」

「2階の3号室の……」

「男性の方ですね」

その男性の様子が、どうやら最近様子がおかしいらしい。カーテンはあまり開かなく、出入りも見られない。それなのに、何故かゴミの量が多いようなのだ。

「ゴミの量は、あくまでわしが見た判断にすぎんですが……」

しかし、余りにも不気味な事態に住人から不安の声も出始めていた。このままだとアパートの「格」にも影響を及ぼすかもしれない、と

言う事で二人に調査を依頼したとといういきさつである。

久しぶりの依頼と、予想以上の解決金で気分が舞いあがる局長をなだめながら、デュークはある程度予想していた。その男性の方と繋がりがある可能性は高いという事を…。

…その日の夜から早速作戦が始まった。局長自身の体を使っての張り込み調査だ。

ちょうど以前に起きた風呂騒動と同じように、数人の「丸斗恵」によるローテーションである。

彼女は「一人」にも「複数人」にもなれる。特殊能力の持ち主なのだ。

しばらく何も動きを見せず、次第に彼女にも飽きの色が見え始めた、そんな時であった。数日後の夜に、動きがあったのは。

今回も数人の「自分自身」で辺りを見回る彼女。

「今日は確か燃えないゴミの日だから…」 「弁当殻を捨てに行く率が高いわね…」

ただのゴミ捨ても、探偵にとっては大きな手がかりに変わる。腐っても探偵である彼女の本能が、感覚を研ぎ澄まさせていた。そんな中、携帯電話が鳴った。どちらの「恵」に鳴ったのかは定かではないが、その着信音を聞いて相手も「自分自身」である事は確信した。と言う事は…

「もしもし、こちらゴミステーション近くの恵！」

「はいこちら本部の恵。どうしたの？」

……へ！？なにそれ！？」「な、何かあったの？」

…三人目の「恵」が見たものは、まさに不可解なものであった。突

然、本当に突然男が現れ、たくさんのゴミを捨て、そして煙のように消え去ったのだという…。

その次の日。

「調べたのですが…以前のような未来の犯罪者があそこにいる、という資料はありませんね」

「そんな！どの機密文書にも？」

「ええ、最大で数千年後までの警察や防衛隊のコンピュータを可能な限りハックしてみたのですが…」

「ええ〜どうということ…？」

何やら物騒な会話をしている恵とデューク。デューク得意の時空改變で気付かれないまま未来のコンピュータに侵入して資料を探っていたようだ…

以前同じような手段で犯行に及ぼうとした悪質な未来人がいたという前例があったのだが、今回はどうもそれとは違うようだ。

「これはもう一度調べ直す必要が…ん？」

「誰か来たようですね」

インターホン越しに彼女が見たのは、どこか気品のある長髪の若い女性であった。基本的に予約を入れていない場合は断る場合が多いのだが、彼女の顔を見て、恵は用件を聞くことにした。その眼から、誰からも救いを得る事が出来ないようなオーラを感じたからである。

「どうぞ、お入りください」

「かたじけなく存じます」

どうやら彼女も身元調査に来たらしい。それも二人も調べてほしい

という。

「なるほど、結婚する事になって、ある方と一緒にいる予定だと」大雑把に言つと、そういう事である。女性にとって結婚は重要な問題、恵が黙っているはずはなかった。

「しかし、密かに恋焦がれている方がおられるということですね」「はい…左様でございます…」

物腰も良く、気品がある彼女を見ると、デュークはずばらでいい加減な局長と心の中で比べざるを得なかった。

富豪である彼女の両親としてはどちらか一方を選んで欲しいようだが、ある程度自由な気風らしく、最終選択権に彼女にあるらしい。その参考にするべく、探偵局に依頼を行ったのだ。

そして、彼女の持ってきた写真を見て二人の探偵は驚いた。ホスト風の一方はともかく、もう一方は以前より何度も見ている顔であった。あのマンシヨンに住んでいる、挙動不審の彼だったのだ。

恵たちの選択は勿論承諾。女性問題と言う事で恵はがぜんやる気になっていた。

…そんな依頼人が去った後、テーブルの上には二枚の写真ではなく、二枚の葉っぱが載っていたことに気付いたのはそれからしばらく経つてのことである。

同時進行で二つの調査を行う探偵局。こういう時こそ、増殖探偵の見せどころである。

美人の依頼人の許嫁である「ホスト」班、挙動不審の「彼」班、（デュークがいる）探偵局班に分かれ、数人単位で調査をする事にな

った。

ホスト風の青年の方は、デュークが能力を使うまでもなくネットで結果が出た。たくさん株を持ち、それで生計をたてているカリスマ資産家らしい。ただ、詳しいプロフィールは裏サイトなどにも載っておらず、直接彼の家付近で張り込みを行う事に。

デュークから情報操作を用いるという考えも出されたが、局長に断られた。実地で張り込みしたいという行動派の心境である。

一方の「彼」班。張り込みを続けるうちに色々分かって来た事があった。

最近どうも探偵局近くで野良犬の声がうるさい…と思われていたがどうも彼の家から流れてくるらしい。一応ペットOKのアパートなのだが、それにしても野性味がありすぎるし、よく聞くと犬とは違う。

そしてもうひとつ。

恵「…あ…油揚げ…?」「」

探偵の技の一つにゴミ漁りがある。ゴミの中に様々な資料が入っている場合があるのだ。

なので皆さま、住所などが書いてある手紙などは手でちぎって捨てるようにしましょう。

…しかし丸斗探偵局はそんな用心も通用しない。お馴染みデュークの能力で、中身をあっという間に解析してしまうのだ。ただ今回は妙だった。燃えないゴミの中身の1/3が、近くのスーパーの油揚げ関連なのだ。

「油揚げ…大好きなんですかね…ってどうしたんですか、局長…」

「ねえ、デュークって妖怪とかの類とか、信じる？」

「あいにく僕は、裏付けされた存在意義が無いもの以外は信じない
思考です。探偵として、当然ですよ。いきなりどうしたんですか？」
「ううん、何でもない」

…このとき、自分の推理に半信半疑だった恵。しかし、数日後、それは確信へと変わる。

「彼」がゴミ捨て以外の目的でアパートを出たのだ。

そのまま駆け出し、山の方へと向かう彼。後を追う恵だが、「彼の動きが結構速い。そこで恵が指を鳴らすと、山へ向かう道の角のいたるところに、恵と寸分違わない女性が現れた。これが丸斗探偵局流追跡方法だ。

無論、前もってデュークに連絡し、ターゲットにはれないように「細工」を施してもらった。位相のずれた彼女たちの動きを、この街の人たちは誰も知らない。

それぞれ情報を共有し合い、合体して数を減らしながら「彼」のたどる道を把握していく恵。追跡の中、ターゲットは山の中に入ったことが判明した。

速報を受け、瞬間移動でやって来た助手のデュークを伴い、こっそり後をつける恵。

そして二人は見た。木々の生い茂る山の中で、一人の「人間」が、一匹の「キツネ」に変身するのを…。

06・隣人調査と嫁入り娘：後編

「彼」の追跡側が動きを見せていた頃、ホスト班も慌ただしくなっていた。ターゲットの男が家から出てきた。どうやら食べ物を買いにコンビニへ向かうようだ。

高めの弁当を買う彼：最近ずっと安物ばかりだったので羨ましがる尾行中の恵数名。すると、男の携帯電話に着信が入ったようだ。内容は至って普通の言葉だが、恵の地獄耳はしつかりと彼の言葉を嗅ぎつけ、脳内の辞書をフル活用させた。単語の繋がりを知識の中にある法則にあてはめると、完全にとある裏稼業の隠語である。

次の日の探偵局は、久しぶりに探偵らしい盛り上がりを見せていた。：と言つても、恵が数十人いるだけで違う顔はデュークだけという、遺伝子的に見ると寂すぎる組み合わせなのだが。

「彼」班は昨日の衝撃的な事実を。

「ホスト」班は男の不可解な電話を。

そして「本部」班。こちらにも不思議な事を知った。依頼人の男性と調査先の男。双方とも共通点があった。ある一定の時期から、公式の記録が一切残っていないのだ。デュークの力で過去の情報を洗いざらい調べてみたが、それでも駄目であった。

ふと恵たちの頭にある思いが浮かんた。過去の事が無い、過去の事を忘れている。まるで自分のようだ、と。それから始まった話し合いですぐに忘れ去られていった。それに、自分は過去の事を振り返らない性分、そんな事気にしないのだ。

そんな話し合いの中、資料として以前の写真が必要になったのだが、信じられない事が起きた。どこを探しても、写真が見当たらないのだ。念のために過去を観察し、その様子を見たデュークが、あまり見せない「驚愕」の表情を見せた。

「どうしたの、デューク!？」

「じゃ…写真が…葉っぱに変わってる…」

そして、ようやく「二人」は引き出しの中でおれている二枚の葉っぱに気付いた。恵は確信した。双方の事件に関する重大な情報。丸斗探偵局は、「化け狐」たちが巻き起こす騒動に巻き込まれたのだ。

「妖怪が本当にいるなんて…」

ひとり言のように呟く助手に、局長は尋ねた。

「未来じゃ妖怪なんて存在しないの?」

彼の様子からも分かるように、彼の来た未来では科学が感情論をも上回るほどに発達しており、妖怪ですらその存在を「肯定」したうえで「完全否定」されている。一言でまとめると、妖怪は「絶滅した」世界だと言う。

「確かに貴方の世界ではそうかもしれない。でもね、デューク。この世には科学がどれだけ進んでも絶対分らないことだってある。これだけは覚えておいて」

「…分かりました、局長。今回の一件、局長主導でお願いできますか?」

「前からそうだった気がするけどね」

…かくして、夜遅くまで「二人」は作戦を練った。今回の一件、強引(デューク曰く)だが鮮やかに(恵曰く)解決できそうな方法がある。

数日後の夜の繁華街。

ホスト風の男が、数人の男を連れて町を練り歩いている。資産家である彼の正体、お察しの通り化け狐である。ある方法で無尽蔵の金を持つ彼、夜遊びもお手の物である。

今日もまた数日前に出会った一人のグラマラスな「美女」と待ち合わせである。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって…」

「いいさ、君を待つ時間もまた乙なものだからね」

「もう…」

顔はてれているが、内心はこの男を貶しているのは言うまでもない。

そして、彼女を連れて歩き出す男。その足は、ある路地裏へと向かっていた。こんなところに来てどうしたのか。その問いに、しばしの間をおいて、男は答えた。

「……………こうするのさ！」

腹に突然衝撃を受ける女性。あつという間に気絶してしまった。…しかし、それこそ彼女…丸斗恵の狙いどころであった。

|| || || || || || || ||

それから時間が経った、暗がりの中。服のまま縛り付けられている恵が、意識を取り戻した。それに気付いた男たちが、彼女を取り囲む。ホスト風の男以外にも、いかにも典型的な「不良」と思われるような格好の連中ばかりだ。しかし、恵はある程度彼らの正体について察知をしていた。

「なんのつもりかしら、化け狐のみなさん？」

「ほう、あんた俺たちの秘密知ってるんだね？」

あっさりと言葉が自分たちの正体を明かしてしまった事に、一瞬拍子抜けする恵。しかし、彼女とてそう簡単に自分の心の内を相手に知らせる事はしない。

「ええ、あなたたちが変身するところ、見せてもらってたの」
勿論、嘘である。

「ちつ、人間ごとに見られちゃうとは俺もまだまだだな」

「ごとき」。その言葉に、恵は引っかけた。

「ああそうさ、お前らのような、化けられもしない、ころつと騙される愚かな生物にはこんな姿の方がお似合いさ！」

ネットで彼を支持する声大きいのも、彼が有りもしない嘘の予定や情報を載せただけ。少し考えれば無理だと分かるのに、誰もそれに気づかず、自分をいい人、尊敬する人だと崇める。

「あんな簡単に俺支持へ持って行けるなんてなあハハハ！」

「ネットはまあ…世論いじるの楽し…。それで、私をどうする気？」

こういう時の場合は、基本的にやる事は一つ。勿論、今回もそれであつた。

「人身売買」。

「だろうね…この流れだと」

「余裕ぶっこいていいのかな？どうせこれからお前は眠りに就く

ことになるのさ、この薬品でな！」

「そんなものに頼ろうとするなんて、あなたの方がよっぽど愚かじゃない？」

「…こいつ、余裕ぶっこきやがって…！」

男が手を上げようとした、その時。

「はいはいそこまでー！」

ホスト狐とその仲間、そして恵が振り向いた先には、依頼人の女性。「彼」、そしてもう一人の恵がいた。一体何が起こったのか、一瞬男には理解できなかった。当然読者の方も理解できない可能性があるるので、説明しておこう。

実は、今回恵の一人を囷にする作戦と並行して、探偵局は「彼」および依頼人の女性と接触。

デュークは女性と。

「…やっぱりばれてましたか…！」

「いえ、僕たちも危うく気付かないところでした」

恵は依頼人と。

「びつくりしましたよ」

「俺たちの詰めが甘かったようですね…！」

あの鳴き声は「彼」が狐に戻った時の鳴き声であった。人間に化けて暮らす中、ストレスが貯まると元の姿に戻り、遠吠えをするようだ。

油揚げはもちろん狐だから…というわけではなく、単に彼が大好きだったかららしい。

そして、もうひとつ重要な事が分かった…

「こ…これは…」

「おやおや、これは。そんなどんくさい田舎狐を連れてどうしました？」

このホスト風の狐こそ、彼女の許嫁として結婚をする約束を交わらせていたものであった。しかし、当然もう彼女には結婚する意志も欲も消えている。

「い…田舎…そりゃ俺は田舎だけど…」

「しっ、静かに…」

そして、依頼人も静かに怒っていた。自分では無い、故郷を貶された事に。しかし、それは隣にいる恵によって代弁された。

「どうしたもこうしたもないわよ！私たちは、あなたの化けの皮を剥がしに来たのよ」

「化けの皮？」

「この人はね、あんたと違って本物のお金で暮らそうとしてるのよ！ニセ札で稼ぐような卑怯者とは違う！」

その一言に、女性は驚いた。隣にいる、「田舎狐」の行っていた事に。

「本当にごめん、あなたに内緒で尾行をさせてもらってたの。見たわ、求人情報を持って工場へ行くあなたを。」

「そ、そうですか…」

「けっ、そんなちんけな安っぽい所で働いて何になる！さあ、どう

！！

狐の前に現れたのは、一人の若い「人間」の男だった。

「あなた、先程人間は愚かな生物、といたしましたね？

人間をなめると、痛い目に遭いますよ……」

妖怪の弱点は、自らの存在を崩される事。

未来の科学は、超的存在を抹殺し、神をも凌駕する。

それから数日後。

「で、ニセ札は全部彼の仕業だったという事ね」

恵が持つ新聞のトップ欄に、ホスト風の男の写真が大きく載っていた。偽札製造の容疑で逮捕されたのだ。デュークの怒りの時空改変によって、彼は過去を変えられ、一生人間のまま罪を償うことになっている。妖怪としてではなく、彼がずっと貶し続けてきた汚らしい姿として。

「ええ。先程過去へ跳んで確認したのですが、あの狐が今まで使用してきたお金、すべてが葉っぱを変化させたものでした。無論、局長が欲しがっていたあの高級弁当も葉っぱの金で買っていたようですね」

「これに気付いてたら、もっと早く私の行動力で解決できたのにな

……あちゃー……」

「まあ、いいじゃないですか。それに、局長もたまには僕に頼ってもいいんですよ」

「局長たる私が部下に頼ってばかりだと墮落するじゃない？だからさ？」

「……さすが局長ですね。」

その時、ドアが開いて恵と同じ顔の女性が入って来た。局長の分身……いや、こちらがオリジナルかもしれない。彼女には分身もオリジナルも関係ない、どちらとも「丸斗恵」なのである。

「で、どう?」

「ばつちり、ほれ! ちゃんとして依頼料が入ってるわよ!」

そう、あの夫婦と管理人からの依頼料金である。

その後、恵たちは管理人に納得できるような形で説明を行った。デュークもこつそり「協力」していたようだが。また、あの部屋にこれから夫婦で住む事になるだろう、ということも付け加えた。勿論本人たちも交えた話し合いの中で。

「うーん…夫婦の依頼料、分割払いローンも可って言ったけどこの金額は少な…ゲフンゲゲン」

「局長…大事なのは金額じゃないですよ」

「そうね、あの人、ちゃんと働いて本物のお金で過ごさそうとしている。」「案外うまく人間社会でやっていけそうね」

「そうですね。今回の依頼、無事解決ということ?」

「「OK!」」

その日は、午後から雨が降って来た。空は晴れているのにも関わらず。

これを、「狐の嫁入り」という。

【強敵出現】

今、丸斗探偵局はかつてない敵に遭遇していた…

「いい、デューク？」

「はい、局長」

「今回の作戦は今までよりも難しいかもしれないわ」

「と言いますと？」

「今までは敵の動きが遅かったから一人だけで何とかできた。でも今回は敵の体力が比較にならないほどになってる」

「それは…まあそうですね…」

「今までの私たちの行動も原因かもしれない、って素直に言ってもいいのよ」

「いえ、過去の事よりも今どうするかが問題です」

「さすが理想の助手ね。…どう、敵はいる？」

「ええ、悠々と探偵局の部屋の中を歩いています…ドア付近と…机の近くですね」

「分かったわ。私が合図をしたらドアを開けて。」

「了解です」

「よし！」

「「こらー！ー！逃がすかー！」」

「あ、こっちに逃げた！早くタンス持ち上げて！」「あんな重いもの持ち上げれるわけ無いでしょ！」

「わーその私はやくドア閉めて！」「閉めたら意味ないでしょ」

「私が倒すのが任務でしょ」「それは私の任務よ！」

「あんたは私でしょ!」「そこ喧嘩してる場合じゃな…わわとんだ!あそこ!」

(局長…完全に僕の能力忘れてるよね…。ゴキブリくらい時空改変で消せるのにな…)

「『『『デューク邪魔!どいて!』』』」

「は、はい!」

|||||

【デュークの大予言】

「ちょっと散歩行ってくるから、デュークお留守番お願いね」

「あ、局長!ちょっと待って下さい」

「どうしたのよいきなり?」

「さっき恵局長の未来を察知したのですが…」

「そっか、未来人だからこれから起きる事が分かるのか。で、どんな感じ?」

「このまま散歩にいくと…局長に恐ろしい事が起きる確率が非常に高く…」

「ふふ、何言ってるのよ!運命くらい簡単に変えちゃうんだから!それでは行って参ります!」

「あ、ちょっと…どんな事が起こるかまだ言っていないのに…大丈夫かな…」

そして散歩中…。

くく

「わっ!足元に犬のウンチが!…でも身代わり作ったからなんとか助かった…」

「わわ、危うくドブにはまり掛けるところだった… 分身能力で回避成功っ」と

「おっとつと…階段でつまづくところだった… 代わりがいるからなんとか私のケガは避けられたわね…」

「目的地の公園に到着！ちよつとのんびりしてよつと」と

…探偵局。

「デューク たっだい…ま…。あの…そこにいる三人の私は…なんでそんなにオコッテルンデスカ…」

「私の靴どうしてくれるのよ…」

「新しく買った私のジーンズ…」

「手の擦り傷痛いんだけど…」

「い、いやその…これは私にも不可抗力でね…ははは…」

「…だれが不可抗力じゃー！」「…」

ギャーヤメターフギャーヘルプミー！！！！

「皆様も、人の話は最後までちゃんと聞くようにしましょうっ」

|||||

【じゃんけん】

「局長って面白いですよね」

「…どうして？」

「今みたいに分身しても、なんか二人ともまるっきり一緒じゃなくて微妙に違うというか…」

「うーん…つまり」「双子とかそんな感じ？」

「それですね。…外見的には違いはないようですが」

「そういえば、私たちってどこか違いあるのかな…」「あまり考えてなかったよね」

「何が違うんでしょうかね…利き手も同じ、髪型も血液型も、細かい分子構造まで同じ…。そうだ、運の違いとかはどうでしょう？」

「…運？」

「たとえば…じゃんけんでどっちが強いとか…」

「へえ、面白いじゃないの」「いいわね、じゃんけんで強いほうがオリジナルと言う事ね」「それじゃあ私で決定じゃない？」「何言ってるのよ、あんたより私のほうが強いに決まってるわ」「私に決まってるわ！」「私よ！」

「まあまあ…ここは直接じゃんけん対決といったところで…」

「…望むところよ！」「」

ジャンケンポン！

1 回戦：グー・グー 「あいこね…」「もう一度！」

2 回戦：パー・パー 「またあいこだ」「次で決める！」

3 回戦：チョキ・チョキ 「またか…」「真似しないでよ…」

4 回戦：グー・グー 「貴方が真似してるんでしょうが」「勝手に決めないでよ！」

「50回戦突破しちゃってる…」

「なかなか決まらないわね…よし、こうなったら！」

「わわ…局長がもう一人…」

「よし、多分私よりジャンケンに強いと思われる分身1号！ジャンケンに挑むのよ！」「ラジャ！」

ジャンケンポン！

結果：チヨキ・チヨキ 「あれ！？ちよつと何よ、あんたじゃんけん強いはずじゃないのよ！」

「へへへ〜こつちもじゃんけん得意な私2号を送り込んだのだった！」

「ぐぬぬ…こうなったら分身2号！ついでに私も参戦！」

(わわ…局長が5人、6人、10人…どんどん増えていく…とりあえず時空改変で部屋を十分に広くとらないと…)

時空改変中

(…よし、10倍は広くなった！これで大丈夫だろう！)

しかし、デュークの読みは甘かった。夕暮れ…

「…あの…局長…」 アイコデシヨ！アイコデシヨ！

「……何よデューク！」「……x約5000 アイコデシ

ヨ！アイコデシヨ！」

「そろそろ決着をつけて頂かないと…時間が…」 アイコデシヨ

！アイコデシヨ！」

「……まだオリジナルが誰か決まってるんだから邪魔しないで！ アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

せーの、ジャンケンポン！…あいこか…「……x約

6000 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

(うつ…こうなったら時空改変をしてジャンケンの結果を…)

アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「「「「「言っておくけど、時空改変で結果つけようとしたら承知しないわよ」ギロツ」「「「「「x約7000 アイコデシヨ！アイコデシヨ！」

「は、はい……」 アイコデシヨ！アイコデシヨ！

（帰ろうにもこの8、000人の局長でぎゅう詰めになって動けない…… わぁまたあいこになってどんどん数が……。うう……局長の胸で息苦しい……どかさないと） アイコデシヨ！アイコデ……！

「「「「「ちよつとデューク！どこ触ってるのよー！」サワッテンノヨー！」サワッテンノヨー！」「「「x約10000

「ひい、すいませ〜ん！」

（誰か助けてー！）

……その後、結局誰が勝ったかは「二人」以外誰も知らないのであった。

07 小ネタ集1 / 主要登場人物解説1 (後書き)

・主要登場人物解説・
まると・めくみ
丸斗恵

身長：160cm代前半

体重：SECRET

一人称：私

二人称：>呼び捨てく、 ちゃん、 さん、 (デューク)

三人称：あいつ、彼

概要、性格：丸斗探偵局の局長。探偵ながら頭より行動が先に出やすく、張り込みなどで得た情報を優先することが多い。また、体に似合わず武闘派な一面も。友情や正義感に熱く、決して悪を許さない一方で、怠け者、お調子者の一面もあり、助手のデュークに注意されてしまう時もしばしば。

外見：薄紫色の短髪、ナチュラルシヨートで、服装は露出を嫌う彼女らしく、冬は赤紫のパーカーの中に黒いシャツを着こみ、下回りはジーンズが主流。体つきはほっそりとしているが、胸のサイズは平均よりも二回りほど大きい。

能力：自らの存在を何重にも増やす事が出来る、「分身」を行う事が出来る。たくさんの自分との連携を駆使し、張り込みや搜索、追跡、さらに格闘まで様々にこなす。分身たちがターゲットへ向けて攻撃を行う直前に一人に戻る事で、衝撃を数百〜数千倍にあげる事も可能だが、後の筋肉痛が酷いらしい。

分身同士や分身・本物間で五感がある程度共有することが出来るが、

自らが分身であるという自覚以外は、基本的に分身の「丸斗恵」たちは本物の「丸斗恵」と独立して思考可能な一身体であり、自分同士で喧嘩をすることもしばしば。ただし、同一人物同士で考えは一緒のため、統率は非常によく取れている。
なお、彼女の秘密を知るのはアシスタントのデュークを始め一部の協力者のみ。

|| || || || ||

デューク・マルト

身長：180cm代

体重：？

一人称：僕

二人称：貴方、さん（局長）

三人称：さん

概要、性格：丸斗探偵局局長、丸斗恵を支える助手。見た眼通りの爽やかな好青年で、真面目な性格。どちらかと言うと肉体派の局長を、自らの知識と頭脳、そして能力で手助けする。基本的には彼女の言葉には従うものの、おかしいと思った事ははっきりと言う芯の通った部分もあり、時々不真面目になったり騒動を引き起こす恵に喝を入れることも。ただし決定権は大半の場合彼女に譲り、呆れながらも笑顔で見つめる事もある。

そんな彼の正体は未来からの逃亡者。かつては「犯罪組織」の一員、それも重要人物として様々な世界で目に余るほどの悪行を重ねてきた。俗に「第八の大罪」とも呼ばれ、彼によって存在を消された家系や生物種、果ては島や大陸は数知れず。しかし、ある事がきっかけで改心、現在に逃げのびた所を恵に救われ、以来彼女と共に活動している。

外見：服装は常に黒の燕尾服を着用しており、恵もそれ以外の服を着た彼をあまり見たことが無い。というより私服姿を見たことが無いらしく、浴衣や着物姿は何度か見ているようだ。

ネクタイは着用せず、Yシャツの上にベストを着る形である。近眼では無いのだが常に黒縁の眼鏡を着用してある。背中まで伸びる黒のストレートヘアーからか、たまに女性と間違えられる事もあるらしい。

能力：時空改変と呼ばれる能力を持ち、局長をサポートする。

どのような内容なのか、乱暴に言ってしまうえば「何でもあり」。過去を変えて歴史を自在に操る事も、地殻変動にきつかけを与えて大陸を作ったり気候変動を起こすのも、果ては命を創ったり消したりする事も自由自在。妖怪や神様ですら存在を消す事が出来ると言われるこの能力を駆使し、前述の通り各地で悪行を積み重ねてきた。現在はその時以上の力を有すると本人は自覚しているのだが、その分危険性もしっかり重んじており、局長や困っている良い人を助ける時、またちよつとした奇跡を起こす時などにしかなるべく使わないようにしている。ただし、余りにも局長が便利屋扱いした時には怒るのだが。

08 痴漢撃退作戦

「痴漢…？」

随分久しぶりに依頼が入った丸斗探偵局にやって来たのは、一人の少女だった。

見た目は高校生くらいだが、その眼はどこか大人びていた…。

「はい…そうなんです…。」

実は最近…電車を使う時に…」

「友達には相談したの？」

「その友達が最初に被害に遭ってしまって…それでそれから少し経って私も…」

探偵局長、丸斗恵としても女性の尊厳を散々に扱う痴漢など許すわけがない。少女の証言をしっかりと聞いていた。

「なるほど…貴方が被害を受けたのは、この鉄道…清風電鉄の本線ね」

近年でも沿線開発で大いに発展し続けている大手私鉄「清風電鉄」。しかし、乗客が増えるにつれて痴漢などの被害も少しづつ増えていたようだ。

「女性専用車もあるみたいだけど…使わないの？」

「あ、その…使った事はあるのですが…あ、あの時は…」

「あ、ごめんね。話したくないときは話さなくていいのよ。事件にはあまり関係ないことだし。」

何両目の車両か、何時くらいに被害にあったか、様々な証言を聞く

恵。すると…

「あの、ちょっと聞きたいんだけど…」

隣に座る、美形の助手、デューク・マルトが口を開いた。

「鉄道警察や乗務員の人には、その事を連絡したのかな？」

「ちよつとデューク、いきなり何よ…」

「いえ…局長には悪いですが、警察の方がそういう事件には専門ですし…」

「あ、あの…」

少し怯えるように、少女が口を開いた。

「すいませんが…この一件、貴方達が一番かと…勝手に思い込んでしまつて…」

「あ、いいのよそんなに心配しないで… デュークのバカたれ」

「う、ごめんね…。うん、でも僕たちをそこまで信頼してくれるんだつたら、お兄さんたちは力を貸すしかないね」

その一言を聞いて、少女の顔が明るくなった。

「ほ、本当ですか！ありがとうございます！」

こうして、依頼は決まつた。

依頼は、「痴漢の正体を暴き、警察へ突き立てて二度と痴漢が起きないようにする事」

報酬は、「清風電鉄フリーパス」

「…でもどうしてフリーパスなんだろう…」

「さあ…。でも一応かなり便利なものですね」

「そんなこと言っても私あまりあの鉄道使わないからね…
デューク、どうしたの？ なにか考えたような感じだけど」

「あ、いえ、すいません…他愛も無いことですので」

考え事をするついで右手の人差し指を顎につけてしまうデュークの

癖。長年コンビを組んできた恵が見抜けない訳がなかった。その予想は当たっていた。デュークは彼女に何かを察していたのだ。普通の人間とは違う何かを…。

「なんだ。じゃあそれよりも、早速痴漢を撃退するための方法を考えるわよ」

「了解です、局長！」

清風鉄道本線は、毎日たくさんの人々を乗せて走る通勤・近郊路線だ。日々たくさん列車が線路の上を行き来している。

しかし、この路線を走る列車たちは、希望や愛に溢れた人々ばかりではなく、悪意に満ちた人々も乗せなければならない。この男のよう…。

(ちょうどここがマッチポイント…かな)

彼が乗ったのは、朝7時45分の列車。私立高校が沿線に存在する花形線への直通便だ。

ちょうどこの高校は成績もさることながら、制服のデザインが近く若者から比較的好評を得ていることでも知られている。

それは、彼のような「痴漢」の常習犯にも同じであった…。

男のジーンズの中には、小さな録画機能付きのカメラが埋め込まれている。お察しの通り、現代の技術では製作不可能なものだ。

ちょうどいい具合に車両が混んできた。ちょうど女子高生もたくさん乗りこんでくる時間帯だ…。

(よ、よし…今日はこつこつ…)

車両のブレーキで倒れ込んだように見せかけて、ターゲットの女子高生の尻に脚を当て、さわり心地を楽しむ。車両が混雑しているの
で、女子高生はむやみに声を出せない…。そのまま不自然な格好を
維持し、スカートの中を写せるように足先を移動した。このまま録
画し、家の中で堪能するつもりなのだ。
内部がスパッツだろうが、尻フェチ胸フェチの彼には関係ない。

「のわわっ!!」

車両が停車するブレーキに油断してしまい、前で吊皮を握っていた
乗客が男にのめり込んでしまった…

「す、すいません…」

小声で謝る乗客に、舌うちで返す彼。気分を害したので、この駅で
降りる事にした。

その一部始終は、その乗客：デューク・マルトによって記録さ
れていた。

自らの体の構造を改変。一種のサイボーグとなり、潜入していたの
だ。

あらかじめ数回タイムスリップして男を特定。その後決定的な現場
を捉えるため、自らの眼をカメラにし、手先には相手の心を読み、
脳内映像を録画するためのデバイスを用意。ブレーキで倒れた時、
男の心を脳内部分に挿入されていたDVDに録画していたのだ。

ちなみに、あの時痴漢に遭った女子高生も、デュークが局長を基に
作り上げた罠だった。自分が痴漢にあったように局長は最後まで反
発していたが…。

「頭からブルーレイディスクを出すのはやっぱり不気味ね…」
「す、すみません局長…。」

でも、これではつきりしましたね、犯人は間違いなく…。」

あくる日。再び例の男は列車に乗った。今度は本線の列車。住宅街から市内中心部の企業ビルへ直結するため、ビジネスマンが多く乗る。

今度のターゲットは…

(この女だ…！)

ピンク色のビジネススーツに身を固め、胸も尻も完ぺき(彼の理論上)。はやる胸を抑えつつ、こっそりと彼女についていった。

今日は車内はかなり混んでいた。…と言ってもこの路線は毎日かなりの混雑度を誇る路線、仕方ない。…痴漢にとってはいい意味で。車内が混んでいるので、すぐにターゲットの尻に接触する事が出来た。今回はわざと手を下においていたので、手も使って触りまくり始めた。

「ああ… ああっ！」

…気のせいだろうか、あえぎ声まで聞こえてきた。p i i vの小説欄に転載するとR15になりそうなこの状況。次第にそのあえぎ声に男は引き込まれ、より手や足の動きを速めた。

…次第に男は異変に気付き始めた。あえぎ声が車内の各地から聞こえ始めたのだ。ふと横を見た時、予想は決定的になった。

彼の周囲にいた乗客が、全員目の前の女性と全く同じになっていた

のだ。声も顔も服も姿も何もかも…。

そして、一斉に男の方を振り向き、微笑みかけた。

これは夢だろうか…？いや、夢でないとおかしい…。ならば、夢なら…！

笑顔を「もつとしてくれ」の合図と捕らえた男は、堂々と胸に触った。大きい胸はさわり心地もよい。すると、近くにいる女性たちも彼に胸を当て始める。そして、次第に彼を波に巻き込むかのように、車内の奥へ奥へと誘導し始めた。

進んでも進んでも、そこにあるのは同じ顔、顔、顔…。まさにパラダイスのような光景に、彼は興奮の絶頂に達した。

そして、近くの女性の所のスカートの中に手を入れた時…

「……この人、痴漢です！！」「……」

突然一斉に放たれた言葉にびびった痴漢。しかし、本気で恐怖を覚えたのはここからであった。彼が手にしていたのは、スカートの中ではなく、「男性のスーツ」の上。すなわち、「股間」である…。彼にとっては余りにも嫌なさわり心地に手を引っ込めてしまう…。そして、周りを見渡してさらに恐怖を覚えた。

そこにいたのは、「女性」ではなく「男性」…。全員同じ冷たい目で彼を見つめ、冷酷さを際立たせるおそろいの黒スーツで痴漢を追い詰める…。

「……ほう、痴漢とはいけねえ奴だな……」

女性にとってはまさにパラダイスだが、（一部を除く）男性にとつ

てはまさに地獄。

そして、そのままドアの端にまで追い詰められた痴漢は…

…

鉄道警察に、痴漢の常習犯が現行犯で逮捕されたのはそれからすぐの事であった。

「男が男があわわわわわわ」とまるで錯乱状態であるが脳内に異常はないようで、しばらく様子を見てから事情聴取をする事になった。

そして。

「局長：女性つて、大変だったんですね…」

「でしょ…まあ私も…男性つて、色々大変だな…って思ったわ…あの感触とか」

「僕もスカートがあんなにスースーするとは思いませんでした…」

実は、あの時の作戦で痴漢に触られたのは、女装…いや、一時的に性転換したデューク（+時空改変で作った彼の複製）の方だったのだ。そして、追い詰めた男というのは…デュークによって一時的に「男」になった恵とその分身たちであった。

あの後、女性を囮に使うとかどうかしていると機嫌を損ねてしまった恵。作戦だから仕方ないというデュークに突き付けたのが、今回の作戦であった。

敢えて立場を変える事で、わざと不自然な状況を生み出し、相手に

恐怖を覚えさせるのも狙いの一つであった。そして、それは見事に成功した事になる…。

「痴漢って本当に嫌ですね…。僕も実感しました」

「女性の敵っていう意味、わかったでしょ？」

「はい。…もう局長を困らなしてしません…」

その会話から少し経ち、依頼人の少女が来た。

「本当にありがとうございます！お陰で私たちも無事に…」

「貴方の喜んでる顔、前来たときよりも輝いてるわ。どうやら心も無事解決したようね」

「はい！それでは…失礼いたします」

「え、ちょ、あの、フリーパスは…！」

そう恵が言おうとした時、既に少女の姿は無かった…。

「え…これってどういう…ってあれ？」

しかし、机の上には、報酬のフリーパスが乗せてあった。

「ま、まさか…お、お化け…？どういう事なのデューク…？」

「局長、これはこのフリーパス、使わないわけにはいかないようですね」

デュークは自らの予想が当たっていた事に気付いた。オカルトは信じない主義だが、今回は違った。証拠が揃っているのだ。

…少女の正体は、清風鉄道を日々走り、たくさんの乗客を乗せ続けている「列車」である事に。

09・恋するアプリケーション・前編

丸斗探偵局は、悩みの渦の中にあつた。

目の前にあるのは、今回の依頼人からの情報をまとめた資料。

「何かに行動を監視されている…か」

依頼人は彼女持ちの男子大学生。ある日を境に、携帯電話に不審な宛先からのメールが多発し始めた。最初は彼女に相談の上、業者からの迷惑メールと判断。メールアドレスを変える事で対処を行った。しかし、それから間もなく、再びメールが来るようになったという。

「そして、その内容がまるで彼の実生活への介入のようだ、と」

テストの具合が悪かった場合はそれを教えるような内容、寝坊した時は目覚まし時計の広告、風呂がうまく沸かせた時には入浴剤の内容が届いていたこともあつた。だったら別にいいのではないかと局長の恵は一瞬考えたのだがすぐに自分でその考えを否定した。見知らぬ誰かからのアドバイスは、確かに気持ち悪い物がある。

と言う事で、依頼料はバイト代の振り込みがまだと言う事で後払いにしてもらった。

助手のデュークと話し合うまでもなく、真っ先に思い浮かんだのは「盗聴」である。あの時聞いた話によると、彼のもとに送られてくるメールの内容の多くは、インターネットのSNSサイトに書きこまれた内容に基づくものであつたという。すると、犯人は恐らくネットに潜り込んでいる可能性がある。ただ、全部と言う訳ではなく、風呂の場合などは本人が独り言で言った内容だという証言も得た。

「複合的に監視していると言う事ね…」

こうなると、丸斗探偵局単独としては一つの方法を使うしかない。そう、ほぼ万能に近い助手のデューク・マルトの持つ力「時空改変」を用いて犯人を洗い出そうという作戦である。だが、今回はデューク自身から断りが入った。

「イレギュラー…?」

「はい。先程資料を参考に少し意識を過去に飛ばしていたのですが…」

「さつきばーつとしていたのはそれだったのね…」

「すいません…。それで、どうも相手は厄介なものかもしれない可能性が出て来たのです。」

局長も知つてると思いますが、僕の能力は…時空を操って過去を変える、というものです。ただ、それは時間の流れに沿って移動できる人たちにしか効かないんです」

「…ちよつとタンマ…」

そう言うなり、恵は三人に分身した。諺にもある、三人寄ればなんとやらを実践しようとしているようだ。

デュークは語りだした。自分が来た未来も含め、大半の生命は過去から未来へ移動する「列車」や「バス」など、時刻表などによって運転される乗り物に乗っていると仮定する。デュークが行う時空改変とは、いわばそれらのダイヤ改正。時刻表を変えて、乗り物の行き先を変える事が出来る権言だ。だが、中にはまれだが、「自家用」の乗り物を持ち、時刻表に左右されずに移動できる者がいるという。

「それが…」「イレギュラーか」「確かに異色ね…」

「ちよつと局長がその一つなのですが、どうもこの犯人…というより、黒幕がそれに値する可能性があるんです」

理屈はよく分からなかったが、原理ははつきりとした。確かに電車から自家用車を見つけても、駅に降りないとそれに乗り換えたりするのは難しいものだ。と言う事で、今回の一件に関しては丸斗探偵局の独自解決は難しいと言う判断になった。

問題はここからである。丸斗探偵局には、独自契約を結んでいるいわば「助っ人」がいる。以前の依頼で、盗聴関連に詳しい探偵を呼んだ事を覚えている方はいるだろうか。あの時は盗聴とは少し違う形の犯人だったために依頼料は無しと言う事になったのだが、今回はその助けが本格的に必要なになったようだ。ただ…

「お金がもつたいない…」

恵が躊躇していたのはそういう理由だった。助手としては納得いかないデュークが、結局押し切る形になって相談する事になったのはある意味当然の流れであろう。

「回転寿司代と助っ人の代金を天秤にかけないでください、局長…」

次の日。突然の依頼にも、助っ人はすぐに駆けつけてきた。

「ひっさしぶりじゃの〜！元気しotta？」

テンションが高めの彼女の名前は「陽本ミコひのも」。主に盗聴関連の依頼を受けながら愛車と共に各地を回る、住所不定の探偵だ。

「相変わらずデューク君はイケメンで羨ましいわ。ほんと恵得じやわこれ〜」

正直なところ、恵があまり呼びたくなかった理由はこれである。季節を間違えたのではないかと思うほどの露出度のタンクトップを上半身に、右半分はジーンズ、左半分はホットパンツという改造ものを下半身に着込むという、この肉体派の美人が台無しになりそうなあの性格。スーパードル値引きセールで中年の女性たちに混ざってさうだと毎回恵は感じている。

「…あの…そろそろ依頼言ってもいい…かな？」

「…あ、そうじゃったそうじゃった。メンゴメンゴ…」

出身地の方言を饒舌に操りながら、ミコはその表情を仕事モードへと変えた。

…ミコへの協力依頼の内容は、丸斗探偵局の依頼人の彼の家の盗聴器の調査。調査報告書を見るなり、彼女はある事を言った。

「これって、依頼人の彼女への調査はやっとなるん？」

ある意味、デュークの予想通りの質問であった。勿論行っているが、まだそこまで深入りはしていなかった。もし彼女が犯人だったとして、それ以上踏み込んだらどうなるだろうか…。

「僕たちが逆に彼女のストーカーになる可能性が…」

「ただ、一応他の所を漁ってみたけど、それにあたる存在は見つかってないのよね…」

彼女の可能性が高い。これをはっきりさせるために、ミコの協力が

必要と言う事だった。

返事は勿論OK。改めて依頼人の男性宅を訪れる事にした。ただし問題が一つ。

「え、ダメ？」

「当たり前でしょ…なんでその格好で見知らぬ男性の所へ向かおうとしてるのよ…」

「え…じゃけえこれがうちの仕事着だって…」

「絶対駄目。もしこれで行ったら依頼料下げるから」

「鬼じゃこいつ…」

喧嘩しつつも考える内容はだいたい同じような二人を呆れつつも笑顔で見つめながら、デュークは早速依頼人の男性へ連絡を取り始めた。

それから数日後、恵の分身体を留守番に、デュークと恵、そしてミコは依頼人の住むアパートの一室へと向かった。

「恵はんの能力は相変わらず便利じゃなー…うちも分身してがっぼがっぼ儲かりたい…」

「あんたがやったら足引つ張りそくな気がするけど」

陽本ミコはカンが鋭い。テストのヤマカンはほぼ確実に正解し、宝くじも当たる日が多い。そんな彼女が丸斗探偵局と接触してから、二人の秘密を知るのにそう時間はかからなかった。ある依頼に協力した際に感じた違和感を、その瞬間を見る事で確信へと導かれてしまったのだ。

デューク曰く、ミコにはある程度未来を「固定」してしまう力があ

るらしく、丁度彼の持つ「壊す」ものとはベクトルが反対に近い事ができるようである。サルがキーボードでハムレットを全文打つのはほぼ無限の月日が必要となるが、ミコの手にかかることでたらいに押しただけでハムレットの文章が数語の誤字だけで完成してしまうのである。ただ、肝心のミコも、あまり彼の話を理解しきれていない様子である。

念のために機材は持って来たのだが、実質そんなものは必要ない。ミコがある、と考えれば盗聴器が隠されている場合が多いのだ。ただ、やはり形から始まらないと決まらないと言つのがミコの信念である。そして彼女のもう一つの信念「最強の武器は最後まで取っておく」と言つ事が一番大きい。

「うーむ…」

丸斗探偵局。調査が終わつた後、フォーマルな服装に身を固めている二人の女性が、結果について話し始めた。

実質の所、ミコの予想通り盗聴器の反応がコンセントの中にあつたそれも一つではない、受話器部分やテレビの部分など、各所にあつたのだ。確実に盗聴の被害に遭つていると言つ事だ。こちらが出来る対処法として、盗聴器の部品を抜いたり電池を取つたりしておいた。これで「相手」側も恐らく大丈夫だろう…。

「ほんで、さつき戻つて盗聴器の発信部分を逆探知してみたんよ」

中古で買った彼女の愛するワゴン兼仕事場兼ロッカー、ボロのロッカーを省略して「ボロロッカ号」。この中に積み込んである電子機

器を駆使し、彼女は盗聴器などから怪しい電波を解析している。逆探知が出来ないはずの携帯電話やスマートフォンですら、ボロロツカ号の機材を利用すればすぐに探知が出来てしまうのである。

「どうやら、恵はんやデューク君に頼んだのは正解だったかもしれないのお……」

「…すると、やっぱり携帯電話とかスマートフォン…から？」

その時に感じた恵の予感当たっていた。ミコが調査した結果、そのスマートフォン番号は、あらかじめ依頼人から聞いていた彼の恋人のものだったのだ。

「…やっぱり彼女がストーカーのようね……」

「そのようじゃのお……」

悲しいお知らせをする必要がある。同性としてこのような事態は避けたかったのだが…。そして、電話口に出ようとした時、それを止める声があった。助手のデュークである。何故止めるのか、という二人の問いに、彼はミコにもう一度資料を確認するように言った。

恵にはよく分からない内容のグラフが連発する資料を読み取っていると、言う事は、恐らく今のデュークの脳内は「プログラマー」の知識で満たされているのであろう。

読み始めたミコの表情が変わり始めた。電波を出すように指示を出しているスマートフォンのプログラムが一つに限られているのである。

「ど、どういうことなの」

「恵はんには難しいかもしれんのお…要するに悪さをしとる大ボスがおるつつつ事じゃ」

「それって…つまり、それを使って彼女が…？」

「それもあります、もう一つ可能性があります。」

もしかしたら、このプログラムが…」

「そじゃ！そっいやこのプログラムって、あれじゃろ、デューク君？」

スマートフォン用のアプリケーションで最近話題になったソフトがある。恋人が今何をしているか、何を食べているかを手の中で把握できるようにした、名を「O T E N T O」というものである。お天道様のように何でもお見通しのシステムのだが、情報漏洩や自由などの観点からネット内などで賛否両論を呼び起こしている。

「まだ推測かもしれないのですが…。」

もしかしたら、犯人はこのプログラム自身かもしれない」

10・恋するアプリケーション・中編

「プログラムが…犯人!？」

いきなりの発言に、恵は拍子抜けした。いくらなんでも突拍子も無さ過ぎる発言だろう、と突っ込みを入れようとした。しかし、助け船はコンピュータのプロからも入った。

「悪いけど恵はん、今回はデューク君が正しいようじゃのお」

「ええ!？ちよ、どうしてよ…」

納得のいかない局長。それもそうだ、「OTENTO」は話題になったばかりのプログラムである。幾らなんでもそんな訳のわからない事態が起こる訳が無い。

しかし、デュークは確信していた。

「局長、以前貴方が妖怪の事を教えてくれた時に、僕は言いました。目で見えたものは確実に信じる、と。局長も恐らく探偵なら、きつと目で見えてくれれば分かるでしょう」

「つまり…何が言いたいわけ?」

妖怪という言葉がさらりと出た事に勘の鋭いミコもさすがに驚くが、二人の間に割って入る事まではしなかった。結構頑固な局長の説得は、やはり一番信用する助手の任務だ。しかし、その助手が顔を向いたのは、意外にもそのミコ本人だった。

「ミコさん、変なお願いをしていますが…」

明日、貴方のコンピュータにお邪魔をしてもいいですか?」

「…へ???」

「まあ…そういう訳なんじゃけどなあ…こんなの母ちゃんの中
から出て初めてじゃ…」

おっさん臭い一言を言いつつ、ミコは自らの愛車にぎっしり詰め込
まれたコンピュータの画面と向き合っていた。耳にはめたマイク付
きのヘッドホンから、デュークと恵の声が聞こえてきた。

今、二人はこのパソコンの中にいる。正確に言うと、二人の意識そ
のものが。自らをデータ化してネットの中に侵入、ふざけた真似を
するプログラムに喝を入れるという事にしたのだ。ミコに一任する
というのがデュークの案だったものの、いざ乗り気になった恵は逆
に自分たちが入ればいいと提案したのだ。これはあくまで自分たち
に来た依頼、ならばここで解決させなければ探偵としてのプライド
が許せない、そう考えたからである。

「男らしいと言うか、イケメン的っつーか…」

『あのー私の性別一切入ってないのはどーゆー…』

『局長、もう少しですよ』

パソコンの画面に映るのは文字列が並ぶプログラミングの画面なの
だが、それがここから見える今の二人の姿。扱いに長けているミコ
にとってはこのような事態はどんとこいのようで、慣れた手つきで
プログラムを入力、的確に二人を案内している。

「そろそろじゃの、その壁を突き抜けたら彼女さんのケータイの
中…というか『OTENTO』プログラムじゃ」

『ありがとうございます。局長…』

「ええ、ここは私に任せて」

そう言った途端、ミコのパソコンには何十列も同じ文字の列が並んだ。局長得意の分身である。それぞれがOTENTOPプログラムの壁の穴を探るべく動き出した。ただ、あまり増えすぎると彼女の携帯電話の機能自体にも支障が出かねない事を考慮し、今回は大人数の分身やデュークの時空改変能力の使用は抑え目にしてている。ただし…

「ん！？こりやまずい、デュークはん！」

『見えてます、ちょうど光線のように：向こうのセキュリティシステムが作動したようですね』

有事の時となれば例外だ。

まるで特定の部分を消すように、文字列が動き始めている。恐らくデータとなっている彼らの眼には、何か光線のようなものとして映っている事だろう。だが、こちらとて負けてはいない。助手の方は比較的軽い身のこなしで避けているものの、恵の方は搜索に重点を置いている事もあるために支援が必要なようだ。

ミコの手の指が、まるで量子力学上の電子のように動く。どの可能性にも対処できる凄腕だ。ただ、やはり相手は手ごわい。それに、静かな戦いの中でミコはどこか違和感も感じていた。対象物を消し去るプログラムが、ここまで長期戦を強いらせる事はあまりないはず。やはり、何かしらの「意図」を持っている可能性が高い。

そして、彼女の耳に待ち望んでいたメッセージが届いた。恵の一人がついに抜け穴を見つけたのである。追跡用のプログラムと頼もしい助手に後を託し、ミコは二人を排除しようとするセキュリティを撤く事にした。機械のように冷たく計算のみの力では、今回の事件の真相を解決できない、そう考えたからである。ただ、念のためにちよっとだけ細工を加えておいたのは、少なくとも恵には内緒にしておく事にした。

「一応あたしだって、今回の依頼主じゃけえの…。
お巡りじゃどーにももらならん相手、この手で焼き入れたる！」

二人が見たものは、無数の写真、ポスター、そして人。どれもみなある特定の女性のものばかりであった。そして、空間に響くのは無数の笑い声。勿論全て同じ声である。

「…改めて聞くと、結構不気味ね…」

問題発言をする局長を諫めつつ、デュークは彼女と共にそこに立つもう一人の影と対峙した。彼らの眼には、それはどこか卑屈な男…というより典型的なヲタ系の男に見えた。

『ボクハ彼女ガ好きダ』

先程から何度も繰り返されている言葉だ。全ては彼…いや、彼女の携帯電話にダウンロードされたアプリケーション『OTENTO』が語った。

そもそもこのプログラムの目的は、ダウンロードした相手を選んだ人物…例えば恋人などの位置などを知る事が出来るというものである。ネット上や最近ではテレビなどでもそれがスパイ行為ではないかと騒がれている。

だが、『彼』が語った真相は、それとは違ったものであった。

プログラムが真に監視していた者、それはこのダウンロードした相手そのものであったのだ。ネットの履歴、データファイルの内容、その全てを静かに、しかし確実に見ていた。それを聞いた恵の体に寒気がしたのは言うまでもない。

その後も『彼』は語り続けた。そうしているうちに、やがてダウンロード相手の写真が消されたりデータが消失する事が度々起きた。何度も吟味していくうち、それはその「恋人」からの電話やメール

の内容によるものであると言う事が明らかになっていった。恥ずか
しめな写真や失敗作、それらを消して言っていたのだがその行為を許
す事は出来なかった。

『ボクハ、彼女ノ全テヲ愛シテイタ』

そのような事が出来ない「彼」は疎ましい。
それが、あのような行為に走らせた理由であった。

「…どうしてそのような事を…」

『言ツタジャーナイカ、彼女ヘノ恋ダ』

「ふざけないで！」

説明は怒りの恵の声で遮られた。それは恋ではなく、れっきとした
ストーカー行為である。それ以前に、相手の嫌がる事を平気とする
事自体、セキユリテイシステムに消されていいレベルの悪事である。
例え相手が何であろうと、恵の持つ正義感は揺るがなかった。

『君たち二八理解デキナイヨウダ…ナラ』

冷たく、どこかねちっこいその声が響くと同時に、対峙する恵の体
に異変が生じた。まるで体の構造が書きかえられるかのように、全
身を痛みが走る。それが収まった時、『彼』はようやく自分の体に
何が起きたのか気がついた。だが、それと同時にその周りの情景も
変化を始めたのだ。グリッド上の地面が各地で盛り上がり、次第に
何かの形になり始めたのだ。
まさか、と思つた時には遅かった。

…以前、女性の尊厳を分かっていたいなかったデュークに女性役の囃を

頼む事で、彼に女性の気分を味わってもらった事があった。胸や急所を無理やり触られる事への嫌悪感、ついでにちよつとした興奮など。だが、まさか今度は自分が逆に同じ状態になるとは思わなかった。

『で…デューク…ああ…』

今、「彼」は無数の体に埋もれていた。どれも依頼人の彼女と同じ姿を取っている。男の体にとっては、女性の胸や尻を体に当てられる事、キスをされる事はどれも自らのホルモンを興奮状態にさせる事に値する行為であることを、無理やり局長は知らされる羽目になった。

『コレデワカツタダロウ、ボクノ気持チガ』

「分かる訳ないでしょ…この変態…くっ…」

言葉とは裏腹に、恵は自らの溢れる欲望に必死に耐えていた。今、彼の視線から見えるのは豊胸な肉体が作りだす肉の海。助手を呼ぶうにも、彼がどこにいるかも分からない。分身して逃れようにも、四方八方を抑えられ、どうにもできない。

…まさに絶体絶命であった。これ乗り越える方法は、果たしてあるのだろうか…。

11・恋するアプリケーション・後編

デュークの持つ能力である『時空改変』。過去や未来の様々な事柄を思い通りに変えてしまおうと言う、ある意味神を超えた能力…のようにも見える。だが、そこにはいくつか弱点がある事はあまり知られていない。例えば、今回のように…。

「くっ…！」

局長がはるか遠くで危機に陥っている事は、彼自身も知っていた。だが、無限に広がる空間からその位置を特定する事が非常に困難な状況となっていた。今、このネット空間は変態ストーリーカー…いや、意志を持ったアプリケーションの思いのままである。限定的だがデューク・マルトとほぼ同じ能力を發揮できると言う事である。

無数に群がる女体の山を何度消しても、次の瞬間には再び彼の視界を覆い尽くす。

『男八邪魔ダ』

「性別すらない君に言われたくないですね」

彼もこの外道への怒りを隠せなかった。だが、減らず口しか叩けないのが今の現状。これでは悪を砕くどころか局長救出すらままならない。そして、一瞬だけデュークの反応が遅れた。

その瞬間、肌色の濁流が彼を襲った。何とか自らの体を改変して位置を保とうとするが、勢いに耐えるだけでも精一杯だ。このままでは局長の体そのものが持たない。打つ手なしか、そう思われたその時であった。

凄まじい爆音と閃光が、デュークや恵の耳をつんざいた。

『ナンダト…!?!』

すぐさま目を慣らせたデュークと違い、恵が彼と再び再会できた事に気がつくのには少々時間がかかった。そして、もう二つ気付いた事があった。自分の体が元に戻った事。そして…

「消えた…!」

辺りを包んでいた濁流が、その姿を消していたのだ。と言う事は…

『待たせたのお!』

二人の耳に元気な声が響いた。

「ミコさん!」

「サンキュ、でも遅いんじゃないの?」

『ヒーローっつーのは遅刻が常識じゃけえの!』

『彼』は完全に油断していた。目先のこと 恵とデューク ばかりを優先しすぎて、その城壁を囲む防衛網へ回らなかつたのだ。ただ、その事はミコもある程度把握済みであった。いくら分身を出す事が出来ても、所詮はプログラム、容量には限りがある。あの時、デュークが濁流にのみ込まれた一瞬、外の守りは援護も出せず崩壊していたのだ。

『それに、お注射したけえもう分身は出せねえはずじゃ』

見る間にOTENTOの顔色が変わっていくのが、三人には一目瞭然であった。

「さて、と」

こうなれば、残るはただ一つ。最後の仕上げのため、先にデュークはミコに引き連れられ、元の体へ意識を戻す事になった。今の状態だと、もうこのプログラムは再起不能、好き勝手にされるがままと言う事だ。生理的に悪寒すら漂うほどの怯え顔を見せる変態を前に、局長の腕が鳴る。

「そんなに女性を味わいたいんなら…」

『ア、ア、ア、AAAfrwaertw9gJ9tarkAQ
//』

壊れたふりをしても無駄である。どの道本当に壊れるのだから。

「楽しませてあげる」「……………」

一瞬だけ、プログラムの容量が限界にまで達し、その後『OTENTO』は完全に沈黙した…。

「…そうか、このプログラム自体に…」

「そうですね、スパイウェアが仕込んであった可能性があります」

本物の太陽の光を背に、二人の恋人に事の真相を語る助手。勿論あ

の大騒動は隠し、美味しい具合に埋め合わせを行っている。

ただ、やはり反応は予想通りであった。謝っても謝りきれない表情の彼女。だが、彼氏の方は優しく言った。それだけ自分の事を心配し、見つめてくれていたという気分だけでも、自分は嬉しい、と。

「そうね」

このような様子を見て助け船を出さない局長では無い。

「確かに今回は裏目に出してしまったかもしれない。でも、その誰かを想う気持ちは絶対に大事にしてほしいかな」

機械ではなく、人間同士のつながりを大事にするように、という忠告も付け加えておくのも勿論忘れていなかった。

そして、依頼人は笑顔で探偵局のドアを開け、希望の未来へと歩み出していた。

…だが、今回は一件落着とはいかなかった。少なくとも恵にとっては。

後日、とある寿司屋に、二人…たまに三人の女性と一人の男性の姿があった。

「随分と食べますね、ミコさん」

「まーな、あたしって漁師育ちじゃけえ海の幸は好きなんよ、なあ恵はん？」

「それは良いけどさ…なんでさっきから高いのばかり頼むわけ…？」

恵は恐れていた。自分の財布の残高が再びすっからかんになってしまふ事を。

と言うのも、あの時余りにも恵が分身し過ぎてしまい、携帯電話の機能そのものに支障が出てしまっていたのだ。他人の場所に潜り込んで迷惑をかけると言うのは、探偵として余りにも軽率な行動である。勿論デュークやミコが協力して治したものの、時空改変で一旦時間を止めたにもかかわらず1日以上かかってしまっていたのだ。

と言う事で、責任を取って全額恵の給料と言う事で回転寿司に行く羽目になったと言う事である。

「あ、そうだ…ちょっと私用事を思い出して…」

「局長」

「恵はん」

「おい私」

…分身に押し付けて逃げようとする彼女だが、やっぱり駄目であった。結局せつかくの報酬も一日でその多くが消えてしまう事になるのであった。

「…あんたが悪いんだからね」

「貴方だって私でしょ…ってそれ私のウナギ！返せ！」

「私は貴方でしょうが！というか今食べたら元に戻れないじゃないの！」

「だからって今食べたら…」

「デュークはんも大変じゃのお…」

「いえ、慣れてますから」

なお、後日新聞に掲載されていた記事で、丸斗探偵局は『OTEN

TO『アプリの開発中止及び回収の情報を知った。隣で笑顔を返す例の男が一枚噛んでいるのは言うまでもない。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0202z/>

増殖探偵・丸斗恵

2011年12月17日01時58分発行